

クセノポーンのオイコノミア思想

関根 靖光

(平成4年10月1日受理)

The Idea of Oikonomia in Xenophon's OIKONOMIKOS

Yasumitsu SEKINE

(Received October 1, 1992)

序

「家政論」の古典として名高い古代ギリシャのクセノポーンの著作『オイコノミコス』(註1)は、彼の師であるソークラテースがアテナイの二人の市民とオイコノミア(家政術)をめぐる繰り広げる対話編の形式をとっている。

全21章のうち6章までの前半は、恐らくクセノポーンの親友をモデルにしたと思われる裕福な市民クリトブ羅斯との問答で、7章から最終章までは、オイコノミア(家政術)の達人として誉れ高い(伝説的人物?) イスコマコスとの会話である。

全編がオイコノミア思想で散りばめられているが、強いて区別すれば前半はオイコノミア原論、後半は、各論が中心テーマであろう。注目すべきは既に前半の第一章において、原論の中核をなすオイコノミアの定義が決定的な仕方ではなされている点である。

以前著者は、その定義がソークラテースとクリトブ羅斯との緊迫白熱した議論を通してどのように確定されるに至ったか、また定義内容をどう理解すべきかなどを、原典に基づいて分析し、その要約を他誌に発表した(註2)ことがあるが、その際の問題提起は概ね次のようなものであった。

クセノポーンが考えていたオイコノミアの定義とは、果して流布しているように、「家を善く治める術」であろうか？

この問に対しては、いまやはっきりと否定的に答えることができる。即ち、第一章で確定されている最も根本的な意味でのオイコノミアの働きはいわゆる家(オイキ
教養部哲学第2研究室

ア)の中の衣食住養育に関する事柄に限定されていない、と。

むしろ、分析の結果明かになったことは、「家も含めなんであれ、所有するすべてのもの(クテーマタ)を、ただ所有するだけにとどめず、それらを活用して本当の意味の富、財(クレーマタ)に変容させること」こそ、オイコノミア本来の目的である、ということである。従って、対象範囲は家内に限定されるどころか、家内外の全体にわたる。また物質的なもののみならず精神的な事象も、それが所有するものと言える限り、オイコノミアの適用範囲に含まれることになる。

ただ、その適用領域が、家の中の所有物に限定される限り、オイコノミアは特殊化され、従来考えられていた「家の管理」へとその意味内容が限定されるということにすぎない。対象が家の外の所有物ということであれば、オイコノミアはまさしく農耕術や狩猟術などと重なることになる。

この極めて一般的なオイコノミアの定義は、その抽象性のため長所短所の両点を持っている。

まず短所であるが、確かにこのままでは抽象的すぎて実用性に乏しい。例えば、家の中の所有物を具体的にどのような作業を通して活用させるのか、それこそ衣食住養育などに関し、オイコノミアの更なる特殊化、個別化がなされねばならない。

他方長所としては、抽象的であるからこそさまざまな分野にこの考え方がモデル(或はパラダイム)として適用されうという点が挙げられる。

例えば、エコロジカルな危機が叫ばれている現代、神学も含めたさまざまな分野で話題になりつつある(註3)問題に、人間と自然との関わりをどう捉え直すか、とい

うのがある。それに対してこのオイコノミア・モデル、或はオイコノミアという技術知に精通している技能者（丁度大工術に対する大工さんのような）を意味するオイコノモスという言葉を使えば、オイコノモス・モデル（註4）が議論の有効な枠組みを提供しうる。即ち「われわれ人類は、果して自然全体、或は地球全体を自らの所有物として所有し、それを活用すべきオイコノモスであろうか、それとも、真の所有者は人類以外（例えば、創造主、自然そのもの、X?）であり、人類はその所有主のためにただその活用を委ねられたオイコノモスであろうか」

人類が前者のモデルを採択し、しかも活用の意味を自分達だけに都合よく利己的に解して邁進すれば人間中心主義的傾向にますます拍車がかかりエコロジカルな危機の一層の拡大が懸念される。後者の選択であれば、大いなる何ものかによって委託されたものの謙虚さ、忠実さで自然に接するという道が開かれる。

このように、原典第一章に見られるクセノポーンのオイコノミア定義は、今後さまざまな方面に有益な示唆を与えることが予想されるのである。

問題提起

さて、本論考が特に扱う問題であるが、既にオイコノミアの原論的定義が解明されたのであるから、次に、より具体的なオイコノミア各論に入っていくべきであろう。本格的な各論は、オイコノミアの達人イスマコスとソクラテースとの対話が始まる原典7章以下に見られる。

オイコノミアの対象空間を、家屋（オイキア）の内外という仕方で区別すると、各論をめぐる問題は、「イスマコスが語る、家の内の事柄に関わる具体的オイコノミアの内容とはどのようなものか？ そして家の外の事柄についてはどうか？」ということだろう。

しかし、本稿の提起する問題は上記のどれでもない。その理由は第7章の冒頭の対話中にある。まず、二人の最初の会話に耳を傾けてみよう。ソクラテースは柱廊の側にじっと座っているイスマコスをたまたま見かけ声をかける。（以下の訳はすべて拙訳 分析上重要なキーワードは必要な限りギリシャ語and/orギリシャ語発音のカタカナ書きを添えることにする。これは、日本語訳による意味理解の混乱を最小限度防ぎ、また問答の持つ筋道や構造を明きらかにするためである）

「もし、イスマコスさん、何故（こんなところで）座っているのですか。確か、お暇であること（スコラゼイン）はあなたの習慣ではない筈ですが、というのは私があなたを見かけるときは大抵アゴラ（市民生活の中心である広場）で何か（忙しそうに）立ち働いているか、或は少なくともお暇なご様子ではないのですから」（原典7-1=7章1節の意）

「ソクラテースさん、（おっしゃる通り普段は暇ではないんですよ）お客さん達とここで待ち合わせる約束をしていなかったら、いまこうして（何もせずじっと座って）いる私を見かけなどしなかったでしょうよ」

「（イスマコスさん、実は前々からお聞きしたかったのですが、）神々にかけて（お答え下さい、）何かこのようなことをしていない時、あなたはどこで時を過ごしているのですか [pou diatribeis] また何をされているのですか [ti poieis] ? というのはあなたは（普段は）屋内（エンドン：endon）で時を過ごしていませんし、またあなたの身体の状態（ヘクシス：hexis）もそのように見えないのですから。そうだとすると一体、何を実行する（プラッテイン：prattein）ことによってあなたは美にして善である（カロスカガトス：kalosk'agathos）と呼ばれているのか、ぜひともあなたにお尋ねしたかったからです」（原典7-2）

。

この下線を施した問、

「何を実行することによってあなた（イスマコス）は美にして善である（縮約した形で、美善）と呼ばれているのか」

は、これ以降の対話の展開を主導する最も基本的問となる。この問に照射され、この間の射程内でイスマコスはオイコノミア各論を含めさまざまなテーマを論じていくのである。

それを主眼的に論じている11章は当然そうであるが、結婚の意義や家屋の目的、家屋内外の仕事の区分、夫婦のパートナーシップなど、多岐にわたる妻へのバイデシア（教育）が論じられる7～10章の根底にも（ここでは美にして善なる妻の生活が説かれる）、また監督者教育や「家の外の事柄のオイコノミア」、特に農耕園芸の術が微細に論じられる12章以下においても、基底には共通して「美善なる生活」というテーマが透けて見える。

このような理由からわれわれは、ソクラテースと同様、「何を実行することによってイスキマコス（善）に美（カ）にして善なる人と呼ばれているのか」をこの論考の問題提起としたい。

但しその前に、原典第一章の分析の結果得られた根本的オイコノミアの内容を復習しよう。というのは、この論考の最後に証明されることであるが、美にして善なる生活の実現そのものが根本的オイコノミアの活用そのものなのであるから。

I オイコノミア原論に関する復習

§ 1 オイコノミアについての最初の定義

第一章、導入的文章の後、直ちにソクラテースはクリトブローロスに対して次の核心的問を投げかけている。

「クリトブローロス君、答えてくれますか。オイコノミアとは、医術や鍛冶術や大工術のように、或る知識（エピステーメ）を指す名称なのでしょうか」（1-1）

クリトブローロスはその通りだと肯定する。ソクラテースは続けて畳み掛けるように次の問を發する。

「わたしたちは、それらの技術知（テクネー）のそれぞれについて、そのエルゴン [ergon] が何であるかを言うことができますが、オイコノミアについても同様にそのエルゴンが何であるか言えるでしょうか」（1-2）

この問で、知識としてのオイコノミアが学問体系のような理論知より、医術や大工術と同様、実際知・実践知であることが既に了解されている。テクネーは技、術、技芸の意味であるが、いま一応「技術知」と訳しておく。さて、技術知ということであれば、何のための技術知か、その技術知の働きの目標や内容（これがエルゴンである）を知ればその技術知の何であるかが大体分かる筈である。それでは、技術知としてのオイコノミアのエルゴンとは何か。

この問に対するクリトブローロスの答えはこの対話編中、最高に重要であった。

「少なくとも私には、アガトス（善い）オイコノミアのエルゴンとは、自分のオイコス（家）をエウ（善く）オイケインすることである、と思われまふ」（1-2）

[dokei oikonomou agathou einai eu oikein ton heautou oikon]

これはオイコノミアの定義ではないが、これを出発点とすることに不都合はない。このオイコノモスに関する定義を原定義と名付けよう。

§ 2 オイコノモスに関する原定義の最初の翻訳

この原定義は、「オイコノモス」を「家父」、「オイコス」を「住家」、「オイケイン」を「治める」と理解することにより、最も単純に次のように訳せた。

「善い家父の仕事とは、自分の住家を善く治めることである」

ここから、クセノポーンのオイコノミアの定義とみなされ流布されているものを導出することは簡単である。即ち、「オイコノミアとは、自分の住家を善く治めることを活動目的とする一種の技術知である」より簡潔に言えば、

「オイコノミアは、自分の家を善く治める術である（≒ house keeping art）」

このような素朴な理解に対し、ソクラテースは矢継ぎ早に質問を浴びせる。両者の問答を通じて定義のより根源的な内容が明かになってくる。

§ 3 オイコノモス原定義の最終的翻訳

ソクラテース質問して曰く、「自分のオイコス、と言ったが、委託されれば他人のオイコスも対象にしないか。丁度大工が自分の家だけでなく他人の家も建てるように」

更に質問して曰く、「オイコノモスとは、大工のように他人のオイコスを扱うことで報酬も得るのではないか、つまり家父というより、大工のように特定の技術知に精通している職業的技能者も指すのでないか」

更に畳み掛けて質問して曰く、「オイコス（家）を住家（オイキア）として理解しているようだが、住家の外で所有しているものもオイコスに属するのではないか」細部は省略するが、一連のこのような問に対しクリト

ブーロスとはことごとく同意を表明する。その結果、彼自身何気なく、そして恐らく素朴に、「善き家父とは、自分の家を善く治めること」程度にしか理解せずに提供したオイコノモスの原定義が、最終的に次のように理解され翻訳されるべきことが解明された。即ち、

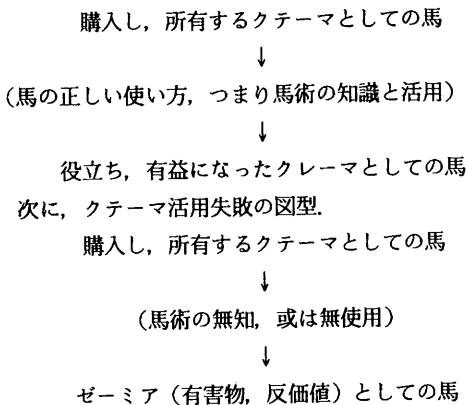
「オイコノミアという技術知に精通している善い技能者（＝オイコノモス）の仕事（エルゴン）とは、（自分のものだけでなく、たとえ他人のものであっても、それに対するオイコノミアの行使が事実上委ねられている）すべての所有物の集合（＝クテーマタ的オイコス）を、有益で役立つすべての集合ないしシステム（＝クレーマタ的オイコス）に現実的に変容させることである（＝エウ オイケイン）」

§ 4 オイコノミアの定義と図型による理解

上記のオイコノモスの最終定義からオイコノミアの根源的定義へはほんの一飛びである。つまり

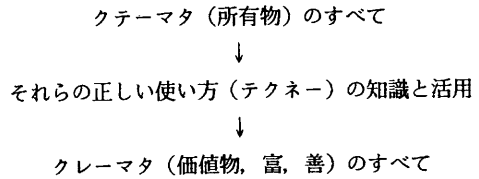
「オイコノミアという技術知の働き（エルゴン）は、（自分のものだけでなく、たとえ他人のものであっても、それに対するオイコノミアの行使が事実上委ねられている）すべての所有物の集合（＝クテーマタ的オイコス）を、有益で役立つすべての集合ないしシステム（＝クレーマタ的オイコス）に現実的に変容させることである」

この抽象的定義は、ソークラテースの提供する具体例によって、より分かりよいものになる。例えば、所有物（クテーマ [ktēma]）として馬を例にとり、それを図解してみよう。



ソークラテースは馬以外にも、クテーマとして土地、羊、笛、金銭、友人などを上げているが、いずれにせよクテーマタ [ktēmata] をクレーマタ [khrēmata] に変容させること（換言すれば可能態としての価値を現実態へ実現させること）がオイコノミア固有の仕事と考えられている。

最後にオイコノミアの一般的図型を見てみよう。



かくしてオイコノミアとは、クテーマタをクレーマタに変容させるテクネーの総称に他ならない。

さて、根源的オイコノミアに関する復習はこれ位にし、本稿の本来の問題、つまりイスキマコスの美善観を主題とする原典11章に直行しよう。

II 美にして善なる生活

§ 1 「美にして善なる人の為すべきことは？」

11章はソークラテースの次の発言で始まる。

「（奥さんの為すべきことについては〔7～10章〕充分わかりました、となりますと今度は）あなたのエルガ（為すべきことども）についてお話していただけますか。そうされれば、なぜあなたが（美善なる人としてそれほどの）名声を博しているか、その理由の説明が十分にできてあなたもご満足でしょうし、それに（なにより）私の方も、美にして善なる人のエルガの内容について完璧に聞き、学び知ることになるでしょうから。とはいっても私にその能力があり、また（教えていただく）あなたに対する（この）感謝一杯の気持ちを（これから忘れずに）私が覚えていればの話なのですが」

これに対し、イスキマコスは

「いいですよ。私が（常日頃）実行し続けて生活を送ることにしている事を [ha ego poiōn diatēlō] あなたが十二分に満足できるよう詳しくご説明しましょう」

と気持ちよく快諾する。その後、ソクラテース自身に関する数節が続き、いよいよ原典11章7節から、イスマコス¹の堅固な生活哲学、計り澄まされた合理性、更に彼の驚嘆すべき実行力が語られる。

§2 イスマコスの生活7原則

イスマコスが「生活する上で、出来る限り試みようとする」（11-7）ことはまず、

①神々を祀ること [theous therapeuein]

「なぜなら私（イスマコス）は次の事に気づいたように思えたからです。神々は、（人間としての）為すべき事も知らず又（たとえ為すべき事を知っていたとしても）それらが達成されるよう励み（エピメレイスタイ [epimeleisthai]）もしない人々に対しては人生うまく行く（エウ プラッテイン [eu prattein]）ことは許さず、また（たとえ）思慮あり且つ励む人達であっても、そのある者達には幸福であること（エウダイモネイン [eudaimonein]）を与え、他の者達には与えないのですから。そういう訳ですから私は（まず）神々を祀ることから始めるのです。

そして、（以下の②～⑦のような善い幸福なことが（神々から）正義（裁定：テミス [themis]）として私に与えられるようお祈りして、（祈願したそれらのことが実現されるよう私なりに）実践に励むのです」（11-8）

さて、イスマコスが神々にその実現を祈りまた実現に向けて自分なりに日々努めていることを彼が述べている（11-8）順に列記すると、

②健康 [hugieia]

③身体²の強壮 [rhōme sōmatos]

④ポリス（国、社会）においては、（社会的）名誉（尊敬）

[timē en polei]

⑤友人達の間での好意（友愛） [eunoia en philois]

⑥戦争においては美事³な（栄誉ある）無事帰還

[en polemoi kalē sōtēria]

⑦きれいな（正しい）やり方で増加させられた富（財産）

[ploutos kalōs auxomenos]

下線部が「美しい（カロス）」に関連する言葉である

ことに注意。②③も身体的美と関わるし、④⑤も心身行の面で「うるわしく美しい」事柄に属すであろう。彼の言うところの「美善」の「美」は①～⑦全体に漲っている。また、これらすべて「人として為すべき」点で、「人間的善」であるが、その実現は、本人の努力に負うところ多いとはいえ、究極的には「神々の正義の裁定」或は「神々からの善き賜」なのである。そういう意味で「神的善」でもある。

ところで、ソクラテースは最後の⑦「富のきれいなやり方での増加」を聞くやいなや、いささか呆れて、或は怪訝な気持ちで（というのは対話編の端々から読み取れるように、ソクラテースにとって、所有しているもの（クテーマタ）を活用して富（クレーマタ）へ変容させることは大賛成であるが、必要以上のものを所有しようとしたり、所有物から金銭的利益という意味でのペリウシア（余剰）を創出して蓄財或は殖財に励んだりすることは、たとえきれいなやり方で為されようとなかろうと、人間として為すべき「善」や誉むべき「美」にふさわしい行為とは到底思えないから）次のように問いた

§3 イスマコスが「富の増加」に励む真意

「（いま、富の増加と言いましたが）あなたは本当に裕福であること、つまり多くのクレーマタ（富、財）を所有して、それらに対する配慮（心配り：エピメレイスタイ [epimeleisthai]）で多大な苦勞をすることに関心がおありなのですか」

この不躰な問に対し、イスマコス曰く、

「その通りですよ、しかもあなたのお尋ねの事柄には十二分の関心を持っているのです。というのは、（増えた財をもって惜しみなく）神々を壮麗に尊崇し、友人達の誰かが必要とするならば彼の役にたち、また私のクレーマタ（富、財）によってポリスが決して無秩序にならないようにすることは、私には喜ばしく思えるからです」（以上、11-9）

つまり、イスマコスの一見して利己的に見える蓄財の真意は、蓄財のための蓄財ではなく、神々を祀り、友人を助け、ポリスに尽力する、という利他的目的にあったのである。

ここで注目すべきは、⑦「蓄財」が孤立した行為ではなく、結果として、①「神々を祀る」、④「ポリスにおける名誉」、⑤「友人の好意」などの行為に貢献し、そのような仕方ですれらと関連するという点である。「諸行為の秩序的連関」（ひいては、諸行為の計画的管理）はイソコマコス（イソ）の行為観を理解するためのキーワードであろう。

ともかく、ソクラテースはイソコマコスの利他精神に感服する。（しかしもちろん、いわゆる「スモールイズ ビューティフル」派のソクラテースには、たとえ利他的であれ「ビッグ イズ ビューティフル」派のイソコマコスのこのオイコノミア観に対し首肯しかねる気持ちがやはり残るのである。対話編の最後の最後まで澁のように残る。）

「うーん。あなたのおっしゃったことは、いや実に素晴らしい（美しい：カラ）、しかも（こういうことは、あなたのように）資力が極端に大きい人物の（正に）やるべきこと（善）ですよ。……ともかく、自分のオイコス（所有物のすべて）をディオイケイン（管理する、治める）できるだけでなく、ペリポイエイン（使わずに蓄え）もできて、ポリス（国、社会）の秩序を維持したり（コスメイネン）、友人達の負担を軽減したりする、といったことのできる（あなたのような）人々を、高邁で強大な人でない、などと考える理由など露ほどもありませんよ」（11-10）

§ 4 生活原則の実践方法を問う

このような感嘆の辞を述べたソクラテースはイソコマコスに再度、常日頃どのような実践をしているのか話すように促す。

「イソコマコスさん、あなたが正に（先ほど）話し始めたところから（もう一度）話してくださいませんか。つまり、どういう風に [pōs] 健康のことを心掛け（エピメレイスタイ [epimeleisthai]）ておられるのか？ 身体の強壯についてはどうか？

また、戦争から美事に（栄誉ある）無事帰還するという神々からの正義（裁定：テミス）が、あなたにあるよう、（普段から）どのように心掛け

ておられるのか？ 財形については、それらの（話の）後でお聞きすれば充分でしょう」（11-11）

ソクラテースは改めて、イソコマコスの生活原則の中、4項目について、その「エピメレイスタイ」を尋ねている。ところでこの動詞は、「心掛ける」「配慮する」「心配りする」などと文脈に応じて訳してきたが、場合によっては「励む」とか「骨折る」などと、実行面を強調した訳でもよいだろう。

一般的に、クセノポーンがこの用語をこの対話編で使用する場合、単に「心の上だけでこまごま関心を持つこと」を意味せず、「実際、心配りの気持ちが行動においてもはっきり現れること、特にそれが習性或は人となりになるほどその人の身体のある方や行為、生活全体に現れること」を意味している。従って、「身をもって心掛ける」と解していれば間違いないだろう。この点で「無駄なおしゃべり [adoleskhein]」ばかりして実行力が伴わず、現実の経験についてよりも、原理について「空虚な瞑想にふけり」（11-3）がちと人々から揶揄されているソクラテースより、イソコマコスは断然現実主義的な実践家である。

§ 5 4原則の行為的関連性の主張

個々のエピメレイスタイ（身をもって心配りする）についての説明がよいよスタートという段になって、イソコマコスは、これら相互の相関性に注意を喚起する。

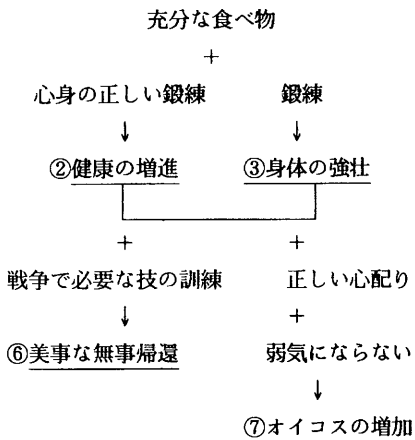
「（いまから一つ一つご説明しますが、その前にぜひ指摘しておきたいことがあるのです。）私には、それら（②③⑥⑦）すべてが相互に随伴している（アコルータ エイナイ [akoloutha einai]）ように思えるのです」（11-12）

それらがどのような具合に随伴的相関性を持つのか、イソコマコスの説明によると、

「ある人が食べるものを充分持つならば、正しく [orthōs] 鍛練する（エクポネイン [ekponein]）ことによって健康な状態がますます続くし、また鍛練する（エクポネイン）ことで（身体の）強壯も一層加わり、戦争で（必要な技）の事どもを修

練する（アスケイン [askein]）ことによってより美事に無事帰還し、そして正しく心配り（エビメレイスタイ）してその上弱気になら [kata-malakizesthai] なければ恐らくオイコス（財、富）をますます増やすことになる、と私には思われるのです」（11-12）

つまり、図解すると大略次のような随伴的相関性が見えてくる。



下線部は生活4原則を指す。注意すべきは、既に前節で紹介したように、イスキマコスにとって⑦「蓄財」は他の原則から孤立した利己的行為ではなく、①「神々を祀る」、④「ポリスにおける名誉」、⑤「友人の好意」などの行為に貢献するための利他的行為なのであるから、上図の⑦「オイコスの増加」から、①④⑤へ向けて、更に3本の矢印が追加されねばならないだろう。このようにして、すべての諸行為が何らかの仕方ですべての随伴的関連性を持っている。

その上、図の出発点の「充分な食べ物」は、実は⑦の「オイコスの増加」からの帰結でもあるので、⑦は結局また出発点に戻り、ここに循環的相関性が生じていることになる。

イスキマコスはこういうことすべてを経験の中から掴み取り、自覚的に日常生活の中に活かしている、ということである。

二人の会話に戻ろう。イスキマコスが4原則（われわれの分析したように、全原則）の相互随伴性を語ると、ソークラテースは一応了解する、が彼の知的好奇心はそ

んなことでは満足しない。「鍛練」とか「訓練」とか「配慮（心掛け）」と言われた事柄の、もっと具体的な内容、言ってみれば、訓練のメニューといったものの説明を要求する。

§ 6 具体的行為に関する詳細な説明の要求

「（鍛練とか修練とか、配慮などとおっしゃいましたが、ところで）健康と身体**の強壮**の為に、あなたはどのような性質（種類）の鍛練（ポノス [ponos]）を使用（クレースタイ [khrēsthai]）しているのか、そして、戦争に関連する事柄をどのように修練している（アスケインしている [askein]）のか、（最後に）剰余（ペリウーシア [periousia]）を生み出して、友人達を援助したり、ポリスを強化するためにどのように心掛けている（エビメレイスタイ）のか、これらのことを知ることができれば喜ばしい限りなのですが」（11-13）

§ 7 イスキマコスの一日：日誌風解説

以下見ていくように、健康と強壮を顧慮した「鍛練（ポノス、エクボネイン）」、戦争からの荣誉ある帰還を顧慮した「技の修練（アスケイン）」、オイコスの増加を顧慮した種々の「心掛け、配慮（エビメレイスタイ）」は、確かにイスキマコスの日常に見事に生かされ、彼の生活に比類のないリズムとハーモニーを与えている。日誌風に語る彼の肉声にしばし耳を傾けてみよう。

但し、考察の都合上、時間順に語られる彼の行為を、「ポノス（以下、鍛練とする）」「アスケイン（以下、修練）」「エビメレイスタイ（以下配慮）」の3カテゴリーに分類する。

カテゴリー

<p>時間順 ↓</p> <p>配慮（1）「（まず起床時間のことですが）たまたま誰かに会う必要がある場合には、家で彼をつかまえられる頃に起床することにしています」</p> <p>鍛練（2）「街で何かしなくてはならない場合はそれらの仕事をするついでに、そのことを散歩（すの機会）として利用します（クレースタイ）」</p>	<p>日誌 ↓</p>
---	-----------------

〔ミニ解説〕つまり、健康のため、身体の鍛練のために、仕事をしに街に行くときは、便利な馬を用いず自分の2本の脚を使うということ。

鍛練(3)「街ですべきことが何もない場合は童僕(若い奴隷)が馬を農地まで連れて行き、私の方はその農地までの(でこぼこの田舎)道を散歩として利用します。恐らくこれは、(体育場などとして使われている)屋根付き柱廊(クシュストス)で(すべすべの床を)歩くより(体に)良いでしょう」

〔ミニ解説〕体、特に足腰を鍛えるためには、スポーツ・ジムのすべすべの床なんかで訓練したり、人工的なペーヴメントを歩くよりは、自然の中を歩き回る方がずっと良いということ。

配慮(4)「(そんな風に徒歩で)私が農地に着くとすぐ、植樹係、休閑地係(収穫した後、次の作物のために農地を整備して回復させる係)、播種係、収穫物運搬係の連中が私のところにやって来ますので、そこで彼らの仕事の状態が各々どういう具合になっているかを検閲し、現行より何か善いやり方があれば改善します」

技の修練(5)「そのような多くのことを終えた後、私は馬に乗って丁度戦争で必要とされる馬術に似た事(の練習)ができるよう、傾斜地や下り坂、溝や水路なども抜かすことなく馬術演習[hippasian hippazesthai]をします。その際(当然のことですが)馬が脚を痛めないようできるだけの注意をします」

〔ミニ解説〕恐らくイスコマコスとは、オリンピック・コースのような人工的施設よりも、実戦に近い自然の難コースを推奨するであろう。

配慮か?(6)「さて、それらが終わると、童僕が馬を砂地で転がらせてから家に連れて帰ります。(しかし)その時、私たちに何か必要なことがあれば、馬を農地から街へと差し向けることもします」

鍛練+修練?(7)「私の方は、(帰り道を)一部は徒歩で、一部は逃走するようにして(駆け足で)

家へ帰り、(家に着くと、汗やほこりを)掻き棒で掻き落として体をきれいにします」

〔ミニ解説〕「アポディドラスコー[apodi-draskō]の「逃走する」という意味から、「駆け足」は単に体を鍛えるためでなく戦場も想定していると思われる。クセノボーンの著作『アナバシス』で報告されている彼の戦闘体験の大部分は逃走につぐ逃走であった。

健康の為の配慮?(8)「それから食事をとります。

(その量は)一日を腹をすかせたままで過ごすとか、満腹すぎる状態で過ごすことのない程度にします」

(以上、11-14~11-18)

§8 イスコマコスの生活設計の再構成

イスコマコスが生活設計しようと思いついたとき、ということが念頭に浮かんだかを想像し、それを再構成することは、彼の考え方になじむためにも、また現代のわれわれの状況と比較するためにも、ぜひとも必要な作業である。しかし、紙数の関係で、ここでは2、3触れるにとどめる。

まず、生活設計するに際し、彼には前もって例の7つの課題が与えられていた。即ち、①神々の宗祀、②健康、③身体の強壮、④ポリスでの名誉、⑤友人達の好意、⑥戦争からの美事な帰還、⑦富のきれいな増加。

そして、彼が解かねばならない根本問題とは、「これらの課題を実現するために、具体的に24時間をどう活用するか」ということである。

彼はさまざまな制約条件をリストにし、最適解を求めて慎重に吟味検討したに違いない。

まず、上記の課題を実現するために、毎日どうしてもなさねばならない仕事のリストを作成せねばならない。すると直ちに、それらの仕事に関わる具体的な制約条件がいくつも出て来る。その中には、自らが赴かねばならない場所のリストもあるだろうし、また特定の場所から場所へ移動するルートやその地理的状況などが含まれるだろう。更にどういう手段で移動するか、馬か徒歩か、駆け足か等等、移動のメニューの得失を検討しなくてはならないし、またメニューの相違による所要時間の相違も考慮せねばならない。更に、農地での仕事の内容も前もって検討しておかねばならないし、そこに滞在する

時間内で、馬術等の訓練ができるかどうか、できるとしたら、どこで、何時間ぐらいなども検討しておかなくてはならないだろう。それに、多くのメニューの可能性の中から、どのメニューが、ある時間内と所定の状況において、達成度と消耗度の両方を勘案した上で、最も効率が良いか、など見極める必要があるだろう。

恐らく、イスコマコスはいずれすべての重要な条件を充分考量した上で、彼独特の鋭い経験知に基づいて、上記のような生活設計をなしたに違いない。彼が現代人であれば、線形・非線形計画法、ゲーム論などを駆使して独自の生活設計法なるものを編み出していただろう、と想像することは楽しいことである。

§ 9 ソクラテースによる時間論的感想

また原文に戻る。ソクラテースは彼の規則正しい日常生活の話聞き感心ひとしきりである。

「ヘーラー神にかけて、いやはやあなたは私の（大いに）気に入るやり方でそれらの事をやっておられますね」

特に、どの点に感じ入っているのか。

「というのは同じ時に [en tōi autōi khronoi] 健康を準備すること [paraskeuasma] も、（身体の）強さを準備する事も、戦いのための修練（演習：アスキーマ [askēma]）も、それに富（ブルートス）への配慮（エピメレイア）も、みな一緒に、活用する（使用する：クレースタイ）なんて、私には（全く）すばらしく思えるのですから」（11-19）

つまり、イスコマコスが、同じ半日の中に生活課題の実現に関わる仕事やさまざまな訓練メニューを、うまく連続的系列を形成するように配分していることに感銘を受けているのである。それにほぼ毎日、規則的にこのスケジュールを繰り返し実行することのできるイスコマコスの強靱な精神力に。

ところで、下線部＝「同じ時に（時間内に）・・・（などを）みな一緒に活用（使用）する」に注目していただきたい。確かに「クロノス（時）」という名詞は「クレースタイ（使用する）」という動詞の目的語でなく、「エン（において）」という前置詞の目的語である。

「クレースタイ」の目的語は当然、「準備する事ども」「修練」「配慮」という名詞である。

しかし、あえて時間論に引き付けて解釈すればソクラテースの感銘には、イスコマコスがわずか「半日」であっても、「その時」をうまく「活用している（クレースタイ）」こと、端的に言えば、「クロノス（時間）」さえもうまく「活用している」ことへの賛辞が含まれているのではないだろうか。あたかも「クレースタイ（使用する）」の目的語が「クロノス（時）」であるかのよう

に。原典一章の、根源的オイコノミアを想起していただきたい。それによると、「クテーマタ（所有物）」を「活用して（使用：クレースタイ）」、「クレーマタ（富、善、価値的なもの）」に変容させるのが、正にソクラテースの考える「オイコノミア」であった。とすると、このように「時をうまく活用する」という事態に対しても、「時のオイコノミア」という言い方が成り立つのではないだろうか。

このような発想が的外れであるか、ないかは、かなり慎重に考えていかねばならないが、たとえ的外れでないにしても、オイコノミアの対象としての「時」とは何か、「所有するもの（こと）（クテーマ）」としての「時」とは何か、「活用され」「有価値的なもの（こと）（クレーマ）」に変容した「時」とは何か、また「時を変容させる」とはどういうことか、そもそも「時」とは何か、などクリアすべき基本的問題の数々が行く手に聳えていることは確かである。本稿では紙数の関係で割愛するが、考察結果は著作で発表する予定である。

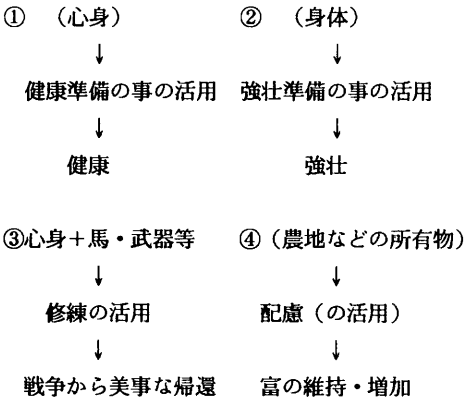
§ 10 原典11-19中に隠されたオイコノミア原論的構図

さて時間論的関心は鞘に納め、少々しつこくはあるが、前項で引用した原典11-19のソクラテースの発言内容をもう一度熟視してみよう。すると、時間論とは別種のおもしろい様相が見えて来る。実は、きれいな形でオイコノミア論的構図が隠されていることが判明する。そのことが見え易いように、翻訳の内容は変えずに、書き方に少し工夫をこらしてみよう。即ち、

「というのは、同じ時間内に、次の事どもをみな一緒に活用するなんて私には全くすばらしく思えるのですから。つまり、同じ時間内に

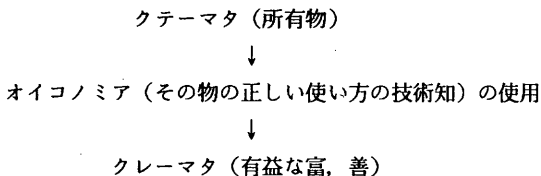
- ①健康を準備するための→事どもも→活用するし
- ②強壯を準備するための→事どもも→活用するし
- ③戦いのための→修練も→活用するし
- ④富のための→配慮も→活用するなんて」

これらを、図型を用い、しかも必要な項を補って素描すると、



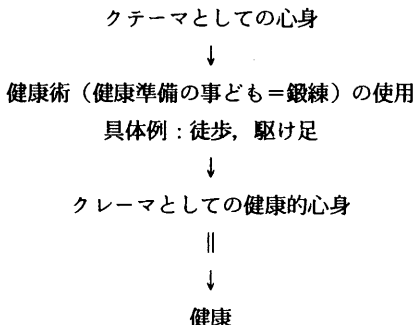
これらの素描を、例の根源的オイコノミアの一般的図型(以後、オイコノミア母型と呼ぶ)と比較せよ。

[オイコノミア母型]



素描的図型に対し必要な補正項を更に補えば、オイコノミア母型に適合することに直ちに気が付かれることであろう。一つ一つ丁寧に復元すると、

- ①「健康を準備する事どもの使用」



- ②「身体の強壯を準備する事どもの使用」

クテーマとしての身体



肉体強化術(強壯準備の事ども=鍛練)の使用

具体例: 徒歩, 駆け足



クテーマとしての強化された身体

- ③「戦争における美事な(榮譽)ある無事帰還のための修練の使用」

これは少し複雑で、アリストテレスの第一、第二可能態及び現実態に丁度対応する、第一、第二クテーマタ及びクレーマタ、という概念を導入し、オイコノミア母型の2階適用によって理解されるが、詳細は著作(平成5年出版予定)の方に譲る。

- ④「きれいな(正しい)やり方で富を維持, 増加するための配慮の使用」

まず図型化の前に、

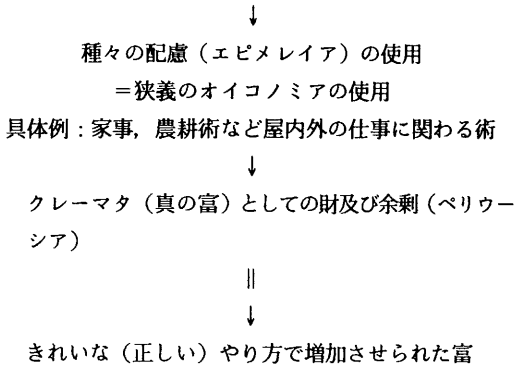
[ミニ解説] この「富の増加」に関する「エビメレイア」

こそ、端的に「オイコノミア」と呼ばれるべきであると批評する向きもあると思われるが、本論は、原典第一章の分析によって得られたかの「根源的オイコノミア=オイコノミア母型」こそ、対話編全体の骨子をなすクセノポーンのオイコノミア思想であるとの立場に立つものである。

いわゆる「富の増加」への「配慮」は「根源的オイコノミア」の適用としては第一等の関心を引くかもしれない。正にその故にクリトブローロスはその一端でも聞いて富裕になりたいとソークラテースにまともわりついていたわけである。

しかし、「根源的オイコノミア」の適用範囲は、「富の増加」に限定されはしない。イスコマコス自身明かに、「富の増加」の源泉となる家(オイキア)外の事柄の配慮(農耕等)だけでなく家内の事柄の配慮もオイコノミアと捉えているし、いま問題となっている箇所では、分析の結果、健康や強壯などを実現するためのさまざまな訓練や修練も、広い意味でオイコノミアと見なされているのである。この広義のオイコノミアが、正にわれわれの言う「根源的オイコノミア」である。それに対し「富の増加」への配慮は、限定された狭義のオイコノミアにすぎないのである。

クテーマタとしての財(プルーツス)



結論的に言えば、単に「富の増加」への配慮だけでなく、鍛練や修練を含めたイスコマコス在日常のエビメレイア（身をもって心掛けている事ども）すべてが、「根源的オイコノミア」の活用である。しかもその活用によって、心身ともに壮健になり、正しいきれいなやり方で富は増大し、そして富の増加と共に、友人への惜しみない援助やポリスの秩序維持のための貢献も存分にでき、そしてとりわけ神々に対して多大な奉獻ができる、一言で言えば、「美にして善なる生活」が現実のものとなるのである。

最後に、それらのエビメレイアが、どのように「同じ時間内にみな一緒に使用」されているのかを見るため、イスコマコスの半日の行状を、時間的推移の方向と、根源的オイコノミア実現の共時的方向の両方向で、一つの

表 1

A群	心身	心身&馬	富（財）	心身
	↓	↓	↓	↓
	鍛練	修練	配慮	鍛練
B群	←（徒歩&駆足）	←（馬術）	←（農場管理）	←（徒歩）
	↓	↓	↓	↓
C群	健康&強壮身体	戦闘能力	真の富&余剰	健康&強壮身体
D群	健康&強壮	美事な帰還	きれいな富増加	健康&強壮
目標	美にして善なる生			

表に統合してみよう。

〔表の見方〕 A群：クテーマタ

B群：使用（活用）される根源的オイコノミアの数々

C群：クレーマタ

D群：イスコマコスにとってのエウダイモニア（幸福）の内容＝生活原則

←印：朝から昼までの時間的推移

↓印：根源的オイコノミア実現の方向

〔ミニ解説〕上記の表から、エビメレイアの数々、即ち根源的オイコノミアの数々が両方向において統合されていることがよく分かる。

第一に、時間的推移の通時的方向で、B群が「朝→昼」と推移しながら「半日」という「同じ時間内に」統合されている。

第二に、根源的オイコノミア実現の共時的方向、ひいては「幸福」実現の方向で、すべては究極的に、「美にして善なる生」という「同一目標」を目指すことによって、統合される。

以上、いかにしてイスコマコスが、一日の生活全体を、多彩な彩りをもつ一枚の秩序ある時間性の織物に織りなしたかのお話であった。

結 語

本稿の問題提起：「何を実行することによってイスコマコスは美にして善なる人と呼ばれているのか」は、以上の考察から充分明かである。

いずれにせよ、彼にあっては、心身物体を問わず、「生きていること」の基礎にあるクテーマタ（所有物）的なものすべては、「根源的オイコノミア」活動を通じて、彼の「生」の中核をいわば吹抜け吹き上げて、クレーマタ（善、有価値）的なもの、より豊かで美しく、より善いものへと溢れ出ていくのである。

しかし、これは物事の明暗で言えば、明の部分にしかすぎない。原典 8 章でイスコマコスが妻に語るフェニキアの商船での体験談は、彼のもう一つの人生観を鮮明に物語っている。暗示だけで終えよう。

「人間の置かれている現状は、たとえ堅固磐石に感じられたとしても、板一枚下は地獄、次の瞬間には海の藻屑、といった大海の小船と同様、不安定、不確かきま

りないものである。どんな瞬間にも、神々の高貴な気まぐれで、何か致命的なことが起きる可能性がきつとある」
このような暗い不安が、イスコマコスの「美にして善なる生活」に、類稀なる硬質の緊張感を与えているのである。

註

- 1 原典、対訳、翻訳
Marchant, E. C.: Xenophontis opera omnia II,
Oxford, 1921, Reprint. 1958
Marchant, E. C.: Loeb Classical Library, 1923
田中秀英, 山岡亮一共訳: 家政論, 生活社, 昭和19
年
Chantraine, Pierre: Les Belles Lettres, 1971
Meyer, Klaus: Xenophos 《OIKONOMIKOS》
Übersetzung und Kommentar, Marburg,
1975
- 2 関根靖光: 家政学の源流を訪ねて, 家庭科教育66巻
6号, 家政教育社, 平成3年5月
- 3 ゲルハルト・リートケ著, 安田治夫訳: 生態学的破
局とキリスト教 魚の腹の中で, 新教出版
1989
McDonagh, Sean: To care for the Earth, Geo-
ffrey Chapman, London, 1986
- 4 新約聖書中のギリシャ語「オイコノモス」(少なく
とも5箇所以上)が「ステュワード」と英訳され,
「ステュワード」という資格で人類は神に対し, 自然
に対してどうあるべきかが問題となりつつある。環境
と人間との関係を考える上でのパラダイムの模索。
Montefiore, Hugh: Can you Survive? Fon-
tana